2022年2月20日（日）主日朝礼拝説教

『絶えず祈りなさい』井上隆晶牧師
Ⅰテサロニケ5章15～26節、ルカ福音書18章1～8節

❶【神の国、終末の考え方について】

オリンピックでの不正問題、コロナの蔓延、ウクライナ情勢、毎日のニュースを聞いていると本当に嫌になります。そんな中で「気を落とさずに祈り続けることの大切さ」についてお話ししたいと思います。18章1節から「やもめと裁判官」の譬えが出てきますが、これは17章20節以下「神の国が来る」という話とつながっていますので、先にこの個所からお話をしましょう。ここでは「終末」に関しての問題を扱っています。神の国はもうすでに私たちの中に始まっているのですが、まだ完成していません。神の国はキリストがもう一度来られる（再臨）時に完成します。だから私たちはその途上にいるというのがキリスト教の終末論、神の国の対する考え方です。聖書はこのキリストが再臨する日のことを「**主の日**」と呼びます。

初代教会ではこの主の日がもう来たという人がいました。するとどうなるかというと、仕事を辞めて山の上で旗を振っている人、未信者の妻や夫と離婚し厳格な生活に入る人、反対に絶望して生活が乱れる人、復活はもう起こったという人などが現れてきました。これは歴史の中で何度も繰り返される現象で「モンタヌス運動」と呼ばれています。モンタヌスという人が最初にこの再臨待望運動を起こしたからです。第二次世界大戦の時も、ホーリネス派の中田重治は再臨待望運動をし、旗を振っていました。異端者たちは「神の国はいつ現れるか、どこに現れるか」ということを問題視しました。彼らは神の国を目で見えるものとして確認したがります。ファリサイ派もそうでしたが、彼らがしるしを求めるのは信仰が無いからです。しかし知らなくても良いことを知ろうとするのは傲慢です。そこでイエス様は「**神の国は見える形では来ない**」（20節）といわれ、しるしを求めず、ただ信じて待つようにいわれました。私たちが世の終わりまで気をつけなければならないことが三つ書かれています。①後ろを振り返らないこと、②金銭やこの世に執着しないこと、③目を覚まし、自分の救いの達成に努力することです。37節の「**死体のある所には禿鷹も集まる**」というのは、神の裁きは必ず死者の上に行われるという意味です。この場合に死者とは、神を畏れない者たちの事であり、禿鷹は神の事だと思ってください。

❷【神の裁きはなぜ遅いのかの理由】

イエス様は続いて、気を落とさずに祈ることを教えるために、やもめと裁判官の譬えを語られました。この譬えの中心は「裁き」にあります。「**相手を裁いて私を守ってください**」（3節）「**裁判をしてやろう**」（5節）「**神は速やかに裁いてくださる**」（8節）など何度も出てきます。「不正な裁判官」の不正というのは、神を畏れ

ず、人に対する憐れみもない事を意味しています。そんな裁判官の所へやもめはやって来て「相手を裁いてください」と訴えました。やもめは旧約聖書の時代から、弱い立場の人の代表として出てきます。「**主はやもめの訴える苦情を顧みられる。やもめの涙は頬を伝って流れているではないか。**」（シラ 35：17～18）夫の遺産の土地を奪われるとか、借金のために子供を奪われるという例が実際にはあったようです。裁判官はしばらくの間は取り合わなかったのですが、そのうち「**あのやもめは、うるさくてかなわないから、彼女のために裁判をしてやろう**」と考えました。。裁判官は正義で裁くのではなく、やもめがうるさいから裁いたようです。そして主は言われます。「**まして神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでも放っておかれることがあろうか。…神は速やかに裁いてくださる。**」（7～8 節）悪人でさえ、動機はどうであれ裁きをするのだから、神は正義の為に必ず裁いてくださるというのです。
ただ「**神は速やかに裁いてくださる**」という言葉は疑問に思え、私たちには神の裁きは遅いように思えます。裁きが遅い理由は一つには「**一人も滅びないで皆が悔い改めるように…忍耐しておられる**」（Ⅱペトロ 3：9）からです。もう一つの意味があります。

●ヨハネ黙示録の 6 章に殉教者たちが「**いつまで裁きを行わず、…私たちの血の復讐をなさらないのですか。**」（10 節）と叫んだ時、主は「**数が満ちるまで、なおしばらく静かに待つように**」（11 節）と告げられました。これが速やかに裁きが行われない理由なのです。昔、ある方から「助けることが出来ないなら、障碍者問題を扱うな」「教会は何もしてくれない」と言われ、心が痛んだことがあります。この言葉は何人もの人から言われた言葉です。この言葉は十字架のイエス様に向けられたものと同じです。「**お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。**」（ルカ 23：39）自分を救ってくれない、自分を愛してくれないメシアと教会に対する恨みです。人間は皆、愛されない事への恨みを持っています。恨みを持っている人は、いくら愛されても満たされません。**人が救われるためには犠牲が必要であり、その犠牲の数が満ちるまでは、人は自分が愛されてきたことに気がつかないのです。特に深い闇を持つ人ほど犠牲は多く必要になります。**

精神科の医師や患者さんたちが、恨みを持つ患者さんの放火によって殺されました。母親を蘇生してくれなかったという恨みをもつ男性が、医師たちを殺害しました。多くの犠牲者が出た悲しい出来事です。人間が愛されなかった恨みや怒りを捨てて、神の愛や隣人の愛を素直に受け入れてくれる日が来るように祈ります。

❸【信じ続けるために祈りが必要】

最後にイエス様はこう言われます。「**しかし、人の子が来る時、果たして地上に信仰を見出すだろうか。**」（8 節）「**人の子が来る時**」というのは再臨の時です。最終的裁きはここで行われます。しかしその時に誰も神に期待していない、神の名を呼んでいないということがあるかもしれない、と警告しているのです。信仰とは

神に期待すること、神の名を呼ぶことです。キリストに裁いてもらうことに待ち切れずに、地上の誰かに頼り先走って裁いているかもしれないのです。
そこで信仰を守るために「祈り」が重要になって来るのです。祈りはキリストを信じられるようになる為にあります。自分の願望を叶える為にあるのではありません。祈らない者はキリストを信じられなくなり、人も信じられなくなります。これは確かです。私は若い時は熱心でした。でもだんだんとその熱心さはなくなりました。私が若いころ、礼拝や集会の中で神の愛の大きさに感動してよく泣いていたのを知っている人もいると思います。今ではそのような涙も流さなくなりました。32 年間この聖堂で祈っていますが、それは信仰を失わないようにさせるための努力だったのだと思います。祈らなければ人はどんどん地に落ちてゆきます。鳥が羽ばたくのをやめたら地に落ち、自転車を漕ぐのをやめれば倒れるのと同じです。
私たちは土から創造され、その鼻に命の息、すなわち天の息を吹き入れられました。こうして人間は大地の性質と天の性質の両方を持つ者となりました。これは動物にはないものです。しかし人間は堕落し、地に帰りました。地にまみれた人間は、地の事しか見えず、人間のすることしか目に入らなくなります。礼拝や祈りは天の世界の中に身を沈めることであり、地に天の香りを移す業です。祈ると、私たちは天の性質を帯び、神の目でこの世と人を見る者へと変えられるのです。

●先日大阪ＹＷＣＡ大宮保育園の前の園長先生が永眠されました。昨年の 12 月 31 日に旅立たれ、葬儀は 4 日に行われました。私たちがその知らせを聞いたのは一か月経った後でした。あまりにも突然でショックを受けました。なぜ、このように心が動揺し落ち着かないのか、私は祈りました。それは人が神を目の前にして生きていないからだと思いました。榎本保郎牧師はこんなことを書いています。「私たちは子供が生まれるとおめでたいと言うし、だれかが死ぬと悲しいことだと言う。それは神の支配を考えていないからである。私たちは神によって生まれ、神によって死ぬのだとすれば、生まれることも死ぬことも同じである。」神が許さなければ人は生まれてきませんし、一日たりともこの世で生きることは出来ません。人は自分で生きているのではなく、神に生かされているのです。「**人の子よ帰れと仰せになります。**」（詩編 90：3）とあるように、人はこの世での使命が終われば、神に呼ばれて帰るのです。死ぬのではありません。昔の人達はそれを体験で知っており「お迎えが来た」と言いました。現代人はそういう感覚が薄れています。自分で生きていると思っているから動揺するのです。地の思いでいっぱいな人間は動揺します。大地は揺れ動くからです。しかし「**主に従う人はとこしえに揺らぐことがない**」（詩編 112：6）のです。

先日、高齢者施設の入居者の方に「先生、歳を取って誰の役にも立たなくなることは寂しいことですよ。」と言われました。私はその方にいいました。「そうですか、そうかもしれませんね。でもクリスチャンは自分に期待せず、自分を愛して

下さる神に期待していますし、来世での約束を期待しています。」この世に希望を置く人は必ず動揺するでしょう。しかしキリストに希望を置く人は絶望しません。私はこの世に生まれた時、一人で生まれましたが、来世に行く時二人で帰ります。つまりキリストと共に帰るのです。この世でキリストに出会い、キリストに結ばれ一体になったからです。その結びは肉体の死をもってしても解かれることはありません。私は私に対するキリストの大きな愛と約束を信じています。その信仰を揺るがないものとするためにこれからも祈り続けたいと思います。